

人。腕からピロンと垂れ下がっているのは布切れではなく焼かれた皮膚が無残にも垂れ下がっているのです。

男か女かわからない。目も鼻もわからない。これが人間と言えるであろうか。道の両側には数え切れない程の人々が折り重なって死んでいる。生きている人間が何時この仲間入りするかわからないのです。私はやっと仁保国民学校にたどりつきました。長い列を作って軍医さんに傷の手当を受けました。アルコールで消毒して赤チンをつけ、大きい傷は麻酔もせず縫い合わせる治療を私は右腰骨に受けました。首と背中も赤チンだけ。

学校の講堂で大豆入りのおにぎりが配られ、立錐（りっすい）の余地もない程の多勢の人々がただ黙々と

食べました。胃袋を満たし、気も落ち着いてよく見ると、気が狂ってしまった母親がわが子の名前を呼び続けている。

また一方では、五、六歳位の男の子がだれにでも「母ちゃん、母ちゃん」と泣きすがりついている。

火傷の人々が全裸で板の間の毛布の上にゴロゴロ転がっていて、片側は毛布にくっついて寝返りも、うてないでいる。手まりの様に真ん丸く膨れて目も鼻もない。やっと二本の細い線と二つの穴で目と鼻の識別が出来、口だけが大きく膨れあがっている。

「水をくれ！」と絶え絶えの声をふりしぼって頼んでも、水を飲まずとすぐ死んでしまうから、もう長くないと思われ人だけ水が与えられる。一週間もすると火傷に蛆（うじ）

がわいて臭くて近より難い。ゴマ油を塗るだけの治療で、どこまでこの人達の命をつなぎ止めることが出来るか。毎日亡くなって行く人達を山のように積んで油をかけて焼く。お骨揚げもなく、墓も戒名も無い。私は二度とこんなことがないようにと、心の底より叫ばずにはおられませんが。

当時学徒動員で行っていた兵器補給廠（しょう）へ行って見れば、大きな鉄の扉は鉛の様に曲がっており、太い樹はなぎ倒されていた。

私は下痢が続き、右側の腹部に痛みがあつて腰を曲げないと歩くことが出来なかった。首や背中も無数の小さな傷あとは、入れ墨の様になつて十年位経った頃ポロポロ取れだした。

心身共に受けた大きな傷は消え去